利根川圖志

ル.4
6317
4

利根川圖志卷四

下總　布川　赤松宗旦　義知　著

荻野藏

印幡沼　印幡郡ゟり其水上い船尾村神崎橋ゟ落さ一方ハ佐倉の城山をめくりて鹿嶋橋ゟり落つ下ハ安食ゟり利根川ゟ合を凡長さ七里廣さ二里許沼の中ゟ佐久知穴まさ花嶋山等あり其外古跡多ー佐倉風土記云倭俗曰沮澤爲沼此亦舊曰印幡沼又曰印幡湖此江也首尾四十餘里有舟楫之便多魚鰕之利而下引海潮宜言江而或沼或湖者鄕語爾故今以江稱焉大江千里有歌曰志毛鬪佐乃伊波能宇羅奈微多豆良之目不那比等佐王伎可羅艪於須奈李其稱浦者盖亦尚矣其源出於神船尾之西北受二小流一自戸神佐山之間一自神平戸之間流會于船尾下廣可二里而東流六七里至師戸會於鹿嶋橋下流而廣可二里

98-70

又東少北流七八里而至平賀自此北折彌張大而瀦廣袤十餘里浸於印幡埴生二郡而北過安食今爲燕尾以入利根川其汎溢之患常在巽風而未必在潦水爲蓋利根川東南朝海若遭巽風帶雨則自海口吹上而水逆行溢入于此焉耳江之爲景不宜于平看蘆荻遮望也宜于登臨矣其登臨者平賀爲佳飯野次之烟收水澄一鑑萬頃環浦之山如揖如坐如走如駐羣屏畫開者平賀之望也浩浩大江一條鎔銀以爲長帶水外綠洲禽飛馬風和斜日而面富士峯于且千里表者飯野之眺也凡環江村三十餘佐山也神也保品也青菅也先崎也臼井也江原也角來也佐倉也山崎也下根也飯野也土浮也萩山也飯田也大佐倉也柏木也下方也北須賀也八代也大竹也酒直也安食也俱連印東而起於乾繞于兌離震以終于坎焉船尾也松崎也吉田也巖戸也師戸也鎌刈也瀬戸也山田也平賀也吉高也松蟲也萩原也中根也笠神埜原也卜枕也皆連

印西而起終田繞效印東者焉吉高東可二里江中有二穴一北一南相違四五十步徑各可五十丈水色深玄底不可測旋渦甚急舳艫難過村民謂之佐久知穴佐久知鰌魚之小者時集于此穴下網取之無數故名焉北須賀以北江上夏間陰濕之夜火出水中離水數尺非漁火非鬼火須臾今散或五六十或百數十若往若來或索或聚乍遠乍近又高又低以窮數時而滅焉亦江上一奇也

田國雜記標註卷上云九月廿八日稲穂の別當ゞ坊ふく湖水をなゞ免と 文明十八年丙午也

道興准后

山色湖光烽又窮　鄉書曾不託飛鴻

砧聲近報孤村晚　旅懷何堪憂患躬

又云々ふ小春ゝ　ふやいさゝうのどりふ侍られてみちく

いふぼの湖水ふうゝびく舟のうちみて酒ふと真行ゝ侍りき

冨士の孫湖ふうつれる心をゝふくよむべきよゝ申られバ

あらみの波間ふらげをやどりきて又あぐひあるふーをえるこうふ 道興准后後知足院関白左大臣房嗣公ノ子三子道興法勇大僧正准三宮三山年新熊野検校聖護院

土産　鯉　鰻　鯔　鱚　鯰　鰌　鯰　鮠　腹赤魚　鯛　海老 ツノガラエビ 中エビ ヌカエビ　蜆　田貝 珠アリ

サイ　マルタ　鱶

ゲバチ ゲンギョ ギバウ 魚譜ふギバ鯛魚一名黄頷魚と足ゆナマヅふ似て少一背及び腮の下の髻ふ刺あと人手とふるきバ螫て甚さ痛む此魚を捕れバごきくと啼く此魚近年至て少ふー物類称呼ふ按ふ享保十三年甲申の秋東國所々洪水せ一頃をこの魚ふーふくくくて後鯰多く成ーハふくぶふくハキハ鯰ふ喪じくるりのあるとそろ変さもと思ハれてきふー

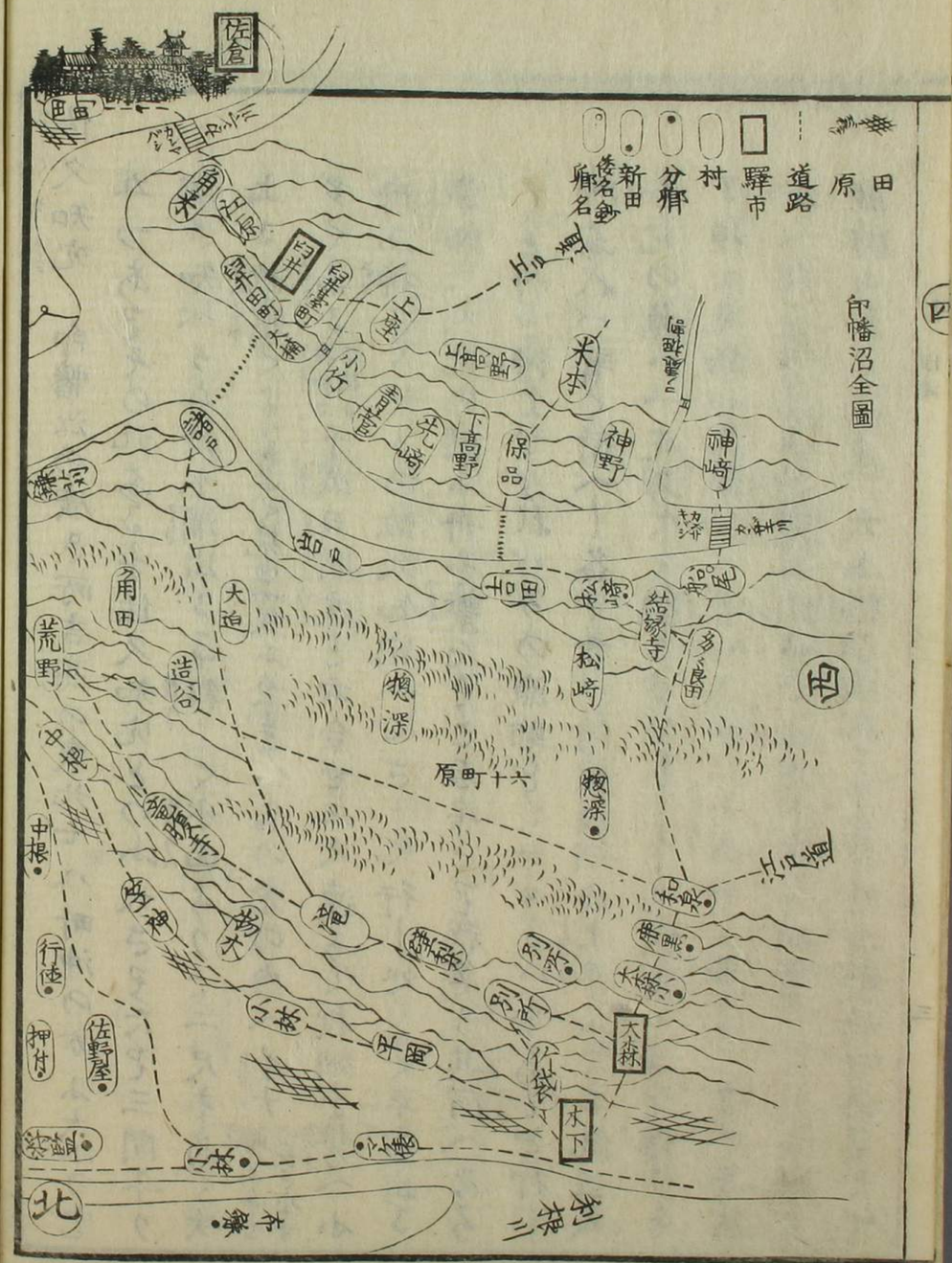
水鳥　雁　鴨　ヒス　ナガ　ハジロ　タカ

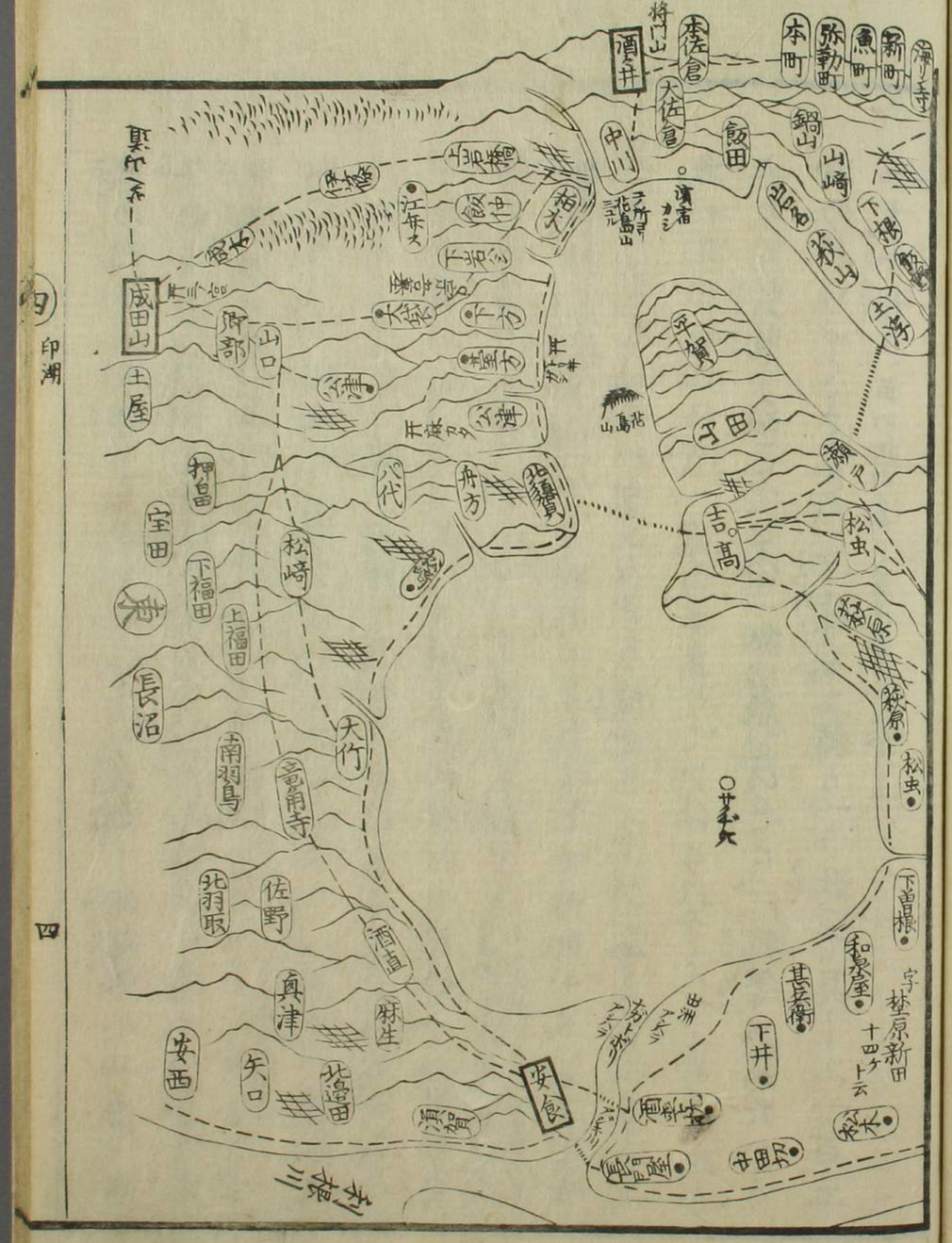
ブ 小鴨　アチ　鷺 蓑多ー　鵜　鴫　此外雑鳥数多ー

水草　菱　真菰　蘆　蒲　荻　川骨　澤浮　スゲふどの類

左多ー

佐久知穴　印幡江の廣き所吉高の東北七八町沖の方ふ大小の穴立つあとその北ふるを佐久知穴といふ大さ廣たと三間斗り深さ知べうら涙水涌出るふ夥しく水面より一二尺も高く吹上る故遠くよりよく見る夏ふ至きバこの穴の内へイナ鰌のふ多も の長さ六寸多く集る 投網ふ予て捕る 或日朋友と云合せ三人連あて投網を携へ小舟ふ掉さくせうの佐久知穴へ心ざして行ー処ふ多く平常出る漁師三人穴の側ふ舟を繋たをこ呑居さと我等も其所へそろくと舟を漕よせをれバうの漁師ども云々ふハ今あこを打ー所ふれバ暫く待べー各々方ハ何程投網の上手ふても此佐久知穴の魚い一疋ふても得る支うさー今ふ我らが捕て得さも る程ふ見物ゐたをべーといふそハ幸の支ふこそとてまづその所へ舟をつふざ竹筒ふ用意の酒あれバそを取出ーおのれものミ漁師ふもふたへをれバ大ふ喜び漁師る弁當の内ふ酢味噌あとと


印幡沼全圖
田
原
道路
驛市
村
分郷
新田
後名
郷名
佐倉
酒井
米本
神野
神崎
保品
下高野
結縁寺
多古
松崎
惣深
原町十六
大森
木下
竹袋
佐野屋
行徳
押付
荒野
角田
大迫
造谷
中根
西神
行方
西内
北


印潮
成田山
土屋
酒井
佐倉
大佐倉
中川
飯田
本町
新町
鍋山
山崎
下福田
上福田
長沼
南羽鳥
高角寺
大竹
北羽取
佐野
酒直
真津
安西
矢口
北篭田
須賀
安食
下井
吉高
松虫
下総原
宇埜原新田
十四ケ上云
知恵屋
甚兵衛
宝田
押畠
松崎
山口
御部
土屋
八代
舟方
平賀
丁田
瀬戸
山島
清水
清戸
清戸
清戸

笊の内より今捕しイナ十四五斗り取出し網補飾小刀にて板子の上にて料理して予是を食せるに常の魚とハ事かハりその美味なる事いふべからず（一躰此魚ハとるとき直に死せるものなれ一時の間も活置ことかなハず故に川辺の者といへども漁師ならでハ生たる魚を食事なし）酒呑ながら漁師のいひけるハ此の佐久知究ハ何処の漁場とさだめあらねバ誰が網打ても宜しけれど手なれぬものにハ一疋の魚もえがたし故に手馴しその網打てその一網の魚を得させるがもとよりの習ハしなりと語りき（この者とし々八年々夏に至れバさくぢ究へきたり出る漁師にてこれハ昼夜このところをはなれず漁業をなせるそのなれしといへり）さて時刻もよろしとて漁師一人ゆるゆると手どりそろく舳先の方にいさり程をうかゞひあミを投かくるに魚ハ網の龍頭の所へ真白に集りてみなこれを見て船人々踊り上りて賞賛しぬさてこの一網の魚をのこらず我等にあたへけりおのれいたくよろこび早速家に持かへり数へて見しに一百二三十斗有き　魚の沢山集る事是にて知るべし

鳥見ヶ岳　印西萩原村にあり鳥見大明神の社あり佐倉風土記ニ云ク所ノ祭饒速日ノ命相殿ノ神御炊屋姫ノ命味間見命也有永禄中之梁簡ニ元禄中社司石井氏請テ吉田兼敬卿ニ奉ス正一位ノ馬

常陸風土記ニ云フ鳥見岳是ナリ

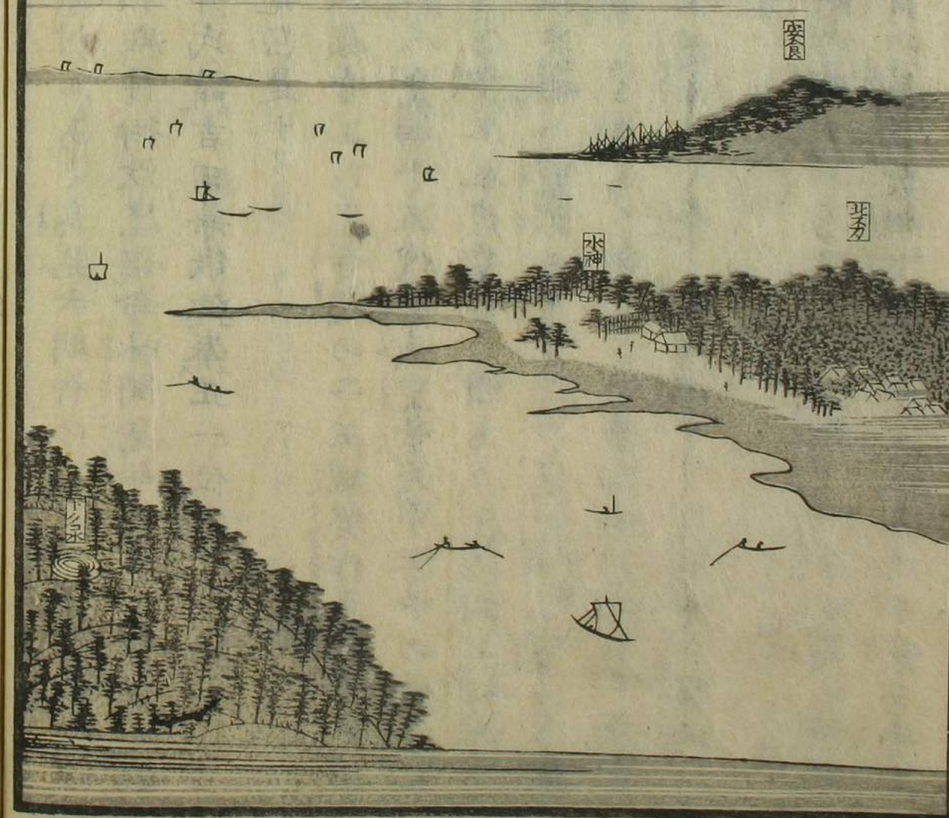
松蟲皇女廟　松虫村松蟲寺にあり寺門の二王端慶作本尊七佛薬師如来行基僧正作人皇四十五代聖武皇帝天平年中の御建立といふ薬師堂の後ろの方に松虫皇女の墳ありその側に社あり俚人姫宮と称す松虫姫ハ聖武天皇第三の皇女（或ハ宮女とも云傳ふ）癩を病ミてとゝに棄らる自らうしく此薬師佛を祈りて愈事を得ゆに後帝都に還幸して薨じ給ふ而して後御骨を當山に安置せしといひ傳ふ

松蟲の陳場　松蟲村野の出口にありこれハ常州河内郡足高の城主岡見中務少輔信貞の長臣栗林下総守義長佐倉の千葉を責ん

印幡沼圖

花島山より筑波山眺望

二夢
まくさるや
印幡の杜鵑
素九



と軍勢を催し布川より利根川を渡し布佐の砦ふハ押への兵
を置笠神小林と戰ひ而して此所ふ陣を
常總軍記巻二十云かくて義長兼てハ瀬戸へ出て沼をめぐを
出水より佐倉へ押つけ有無の合戰をせべーと号令せしめ々
るふ松虫の墓ふ陣し人ちづまりて義長心ちづるふ軍氣天文
をうんぐみるふ義長大ふ怒やしき海老原次郎を近付東の方
へ由ぐさして今佐倉の方ふ向ふつて一行の赤氣西北ふ靄く
我察をるふ千葉勝亂今度義長此道を押来る事を知て道筋ヨ
堅固の要害を構へ當手の勢ふ乎間とらせ日数を經る其内ふ
引ちらへて香取郡へ打出小見川及ひ高田松岸を越え利根川
を渡つて常陸へ逆寄をへき斗策此雲瑞ふ歴然さを去バ此所
ふ心を迷して香取郡より攻入らきんハ以の外の大事成べー
潜ふ兵を引取て高田ふ出て敵兵を防へきあを去あぐら千葉

佐倉の様子を知を得ぐさ〜左細作を出して是をさぐるを雖
ども今明ふらぐ如何せんと思ふふ我今ト筮して是を見るふ
雷澤歸妹の卦也是味方ふよき助けの人来るべー中畧ふ〜ふ
尾張國小河の住人小河左馬次重知といふ者ふり彼ハ清和源
氏の正統左馬頭淵政の後亂ふして名家の末ふり〜ふ左知謀
を兼備しいまぐ年若うををバ武者修行として関東へ下り
上野下野を經て常陸の水戸ふ有を夫より千葉ふ来る其時ハ
千葉も静ふふを〜れバ武をこぐく事も遠ざらきり暫く足を
止むべりりるぐ千葉の老臣原式部小河を臣下とせんと二
千石を沃さふべーと也しぐ小河ぐ心ふ叶ひぐ陪臣と呼きん
支本國の聞えもいうぐふりと思ひ是を辞して東海道を上ら
んと思ひるぐ岡見の老臣遠藤又右衛門ハ相知きる者ふり
しうハ今度義長といふ者を軍師として兵を千葉へ出そと

ほとゝへ聞くたとひ遠藤此軍中ニならずとも知る人のもゝ
あれ尋問せざるも殘り多しいつれ彼陳ニ至らバ遠藤ゞ安否
を知るべしと思ひしらバ印西へ渡る斯て義長ゞ陳ニ來りて
遠藤を尋ゝるニ二の手ハ大將として此陳ニありゝまを小河
大ニよろこび對面してむかし今の物語せゝゞ遠藤ものがたらく
小河を止て義長ニ委細を物語ハ義長さてハ味方ニ吉瑞有と
見えしハ小河ならんと思ひ對面せべしと有ゝまバ小河も辭
せべきニあらず拙バ遠藤と共ニ義長ゝ本陳へ行て謁しゝるニ
義長ハ小河ゝ姿を見るニ其長六尺餘ニして年未ゞ三十ニた
らぬ勇猛兵びなき男なきハ頼もしく思ひ酒ゝんをふして後
千葉ハようきを尋ゝるニ小河申ゝるハ千葉勝胤當時印幡郡
佐倉ニ在城せり斯て其近鄉盡く守衛を置たゝまゝ下總香取
郡を籠下として右家臣を交へて堅む滑川ニ織田右京助崎ニ

内田信濃寺臺ニ貝室加賀大倉ニ二条大内蔵小見川ニ粟飯原
左衛門小見川越前守千葉東郡ハ一圓ニ東の六郎是又隨一の
連枝ニして強勢の者なれ其上六郎大力ならびなく早葉の名
譽荒馬乘ニして大太刀を得たゝ弓ハ楚の揚由を欺き大剛ニ
して流をあつけ寔ニ大將の器なる事千葉ニ肩をならぶる者
更ニなし又米の井ハ木村能登吉沼ハ地涌監物長沼ハ大野修
理原坂ハ平外記荒海ニハ荒海左衛門大竹ニ大竹次郎兵衛飯
岡ニ飯岡勘解由馬加ニ馬加七郎船橋ニ布施五郎鷺沼ニ木村
十太夫大須賀ニ大須賀四郎是勝胤ゞ家ある圓城寺ニ村田筑後圓城
寺備前村田臺ニ村田兵衛山部ニ山部八郎左衛門森戸ニハ森
戸五郎宮戸ニ宮本若狹川村ニ川村大炊岩尾崎ニ只越義濃神
崎ニ大和太郎左衛門出水ニ大谷半左衛門藤崎ニ藤崎隼人同
四郎左衛門飯高ニ飯高播磨同十郎鏑木ニ鏑木日向同次郎左

衛門櫻井ハ櫻井式部神大寺原ハ石上外記石橋ハ石橋大膳同
若狭小石橋ハ伊藤平次左衛門同與市郎高井灘ハ大野弥左衛
門吹上ハ風間平右衛門同平十郎一ノ分目ハ高野内匠二ノ分目三
ノ分目同人ゟり木梨ハ木梨内匠同善左衛門森本ハ森本平太夫
廣岡ハ廣岡縫殿青木ハ青木土佐伊能尾ハ伊能尾越前同勘解
由同四郎左衛門伊能尾山ハ山崎主税金田ハ金田刑部神々廻
ハ神々廻丹波惣深ハ惣深六弥林ハ林飛彈鳥井ハ鳥井筑後
同惣右衛門其外藤田對馬同縫殿之丞武田左近芝田宇右衛門
久古主斗秋山内記中野ハ中野ハ遠藤左兵衛布鎌ハ布鎌但馬九岡
喜一同彦市垣生ハ垣生大和迎瑳ハ迎瑳四郎宇津野又市宮小
四郎同圖書臼井ハ臼井次郎成田ハ成田八郎天野弥太夫長澤
ハ小倉入道同次郎右衛門秋山蔵人佐原ハ木内八郎左衛門高
橋藤兵衛小野傳八竹川圖書飯田新八郎松崎久内推名ハ推名

門後岡野内膳澤田五郎左衛門高橋弥八竹内兵部羽川四郎左
衛門田口ハ田口刑部其外あけて筭へ難し又香取郡の多古
高岡ハ舎弟千葉頼胤あゟ生實より北ハ千葉の内ハ老臣
原式部在城せりまゝ安食ハ松田藤右衛門大竹ハ大竹平次
左衛門萩原ハ萩原登弥太吉高ハ吉高代丞吉橋ハ吉橋中務笹
川石見其外松岸本庄高田以下をくて其數五十八城八十八館
砦九十三餘ゟり然るハ今度香取郡ハ出張して高田を渡り直
ハ利根川を越て常陸ハ働くべき評定の候なゟさきハ此所ハ
陳し給いん事詮ゟるべし若利根川を渡し常陸へ乱入せバ
脇を吹とも甲斐あるまゝ今度香取出張の主將ハ彼東六郎鎮
胤を以て惣轄とし二条大蔵太夫鳥居筑後村田兵衛次將とし
て一万餘騎差到ゟゟ中畧御評定ゟりていそき高田へ陳をう
つされ然るべき哉と申ゟり義長聞てさゝそ有べしゟれ昨夜

天文を考へ尚まさ雲氣と見るふ赤氣西北をつらぬけるあり。こゝ其さざ一也。又ト筮せしむるふ味方ふたそけあるれ卦を得さ
ゝ。是貴客の物語を聞べき善卦ふり。今ハ疑べ〳〵れそみやう
ふ陳を高田ふ移して戰ふべ〳〵　下略

吉高代々城跡　吉高ふあり掛鼻といふ山の上ふあゝ。東ふ印幡江を眼下ふ見おろし風景至て義ふゝ。西ふ御門坂あゝ。南ふ家老内和田屋鋪ふど云地名今猶存そ。其外ロと唱ふる地名甚多し
和田ロ南ロ西ロ北ロ丑ロ坂ロ野ロ向ロ向路ロ城田ロ殿田ロ
向田ロ竈巷ロ馬草田ロ等あり。北ふ船戸南ふ蕪田河岸あり　是より北須賀へ舟ふて安能橋ハ山田村へ行堤の中程ふあり

吉高鮒　名物ふゝ。金色ふして骨堅し。肉ふまりて味義ふり。此鮒をとるふ一種の漁業あり。冬の漁まづ一人小舟ふ乘り。水淺き所を棹さしふぐら舟を蹈て舟を左右へ蕩揺そふの

浪音ふおどろきて鮒ハ藻の根ふ隱る。その水中の濁るを見て手ふて是を握ことる。故ふてどゝ鮒とゝもいふ。萬葉集のモブシツカブナ是ふりツカハ握の義ふり

カハボタル　俚言ふカハボタルといふそれあゝ。亡者の陰火ふる由。形ちたくして大さ蹴鞠の如く。光りハ螢火の色ふ似たり。夏秋の夜あらハるゝ雨の夜ハ至て多し。水上一二尺離れていくつも出て遊行そるゞ如し。或ハ聚り或ハ散ト又ハ高くゝ低くゝ。時ハ矢のごとし。久雨の節ハ夜ふく多く是をみるゝ花嶋山へ龍燈の上ることゝ。ふりさく陰火龍燈のたぐひ種々の書ふ多く見ゆきど。詳ふるハ春暉ゲ見るゝ西遊記ふもるし。筑紫のちらぬ火。まさ越後國新道村飯塚氏の咄しを牧之老人雪譜ふ出したる。頸城郡米山の竜燈ふゝ。こふ又一奇説を擧ぐ。

義知壯年の頃印幡江の邊ゝ吉高和名抄ふ云印幡郡吉高ふあゝしゝと紀頃ハ五

月の未ふ已しゝ朋友来りて云ふる やう。今宵ハそらもさきて
いと静ふれバ歴こふ釣に行べーといひ出るゆゑ。予も幸の事
ふ已と思ひ。早速仕度どゝの〳〵二人連立河岸ふ行手ふく〳〵ふ
舟ふうち乗江の半ふ至り朋友の舟と十間ぞうり隔て掉つき
立舟を繋ぎ釣をたれて居ゐりふ寂早子刻ともおぼしき
頃俄ふ空ゝき曇已。朦朧として物さびしく程ふく大風吹起り。
雨降いだし誠ふちんの闇とふり十間斗已ちゐれ居ゐる朋友
の舟も見えぬなりぬ。ハいぶこうーと思ふ内幽ふ遠水中より
一つの青き火閃〻と燃あがりぬ是ふんゝの亡者のカハボタル
んと見居たるふだんゝと已ゞ方ふ近付来りぬ。逃ゝくらんと思
へとも風ふよゝきバ舟を動ゝも事もあらぬ。衣服ハぬきて戰
慄をるふ心をちづ免朋友と呼
せんとたゝらふ内ガハボタル
ハ已ゞふねの舳さきふ来たり

ハいふふハーと思へども声ふ出ぬ。目をとぢて一心
ふ念佛をるのゝふ已。暫して雨やゝ風ゝちと静まりぬれハ
ハぐと目ゝ開きゐるふ。ゝやカハボタルハ何處へ消うせ空
ゝ少し晴て朋友の舟ゝとの處ふ居ゐりこれとゝゝそゝと
ゝといざ。今のカハボタル我見しやと問へバ。我もみたれ共
おそろしさふ物も云ハぬと答ふ。やう〳〵人心地付て早々我家
ふゝの来りぬ翌朝漁師ども大勢居たる所ふて右の咄しをく
ゝく物語せしふ猟師ども云ふハ其くらゐの事ハ度々の
事ふり。我ハ一昨夜漁ふ出しふ彼カハボタル我ゝ舟ふ乗たり
其時ハ大勢ゆゑおそろしとも思ハぬ。舟掉を以てからふ任せ
打ゐゝきし所碎け散て舟一面ふ火とゐ已塗付ゐる如くその
鯉さ支壁ふ已き物ふ。其質油ゝ如く阿膠の如くぬるゝ已ゝ
くとして落ぞ。みゐく打寄りやうゝと洗ひ落しぬと大勢の

物語なり。又其内一人の云くるハ。四五年以前の支ふるがときあり。
或夜投網うちけ艫漕ふ出し所彼カハボタルいくつともふく
出來て舟近くふいくと飛めぐる。網とりハ剛氣の男ゆゑ此時
小声ふて我ふさと〳〵紙を我もらふべきなくら舟伐廻らし
らのカハボタル残追ひけまハす。網ゝりハあらを小脇ふ引ら
ゝ〳〵舟の舳さきふ突立あぐり。手頃を見さだめて投と網伐
投々きバ按ふたがらぐカハボタル一ッ伐打かぶせぬ其時え
腥き支いくん方ふく。網の中ハ一面ふ青紅火とありぬるくし
て落次。いかんともせべきやうなく手ふてえみ洗ひそれバ其手二三日
迄腥かるし故。一昨夜8大勢ふて舟伐洗ひしが我ハ以前あり
て居しゆゑ迄と云次手伐付ざりしといひく大ふ笑ひぬ。のカ
ハボタルといふそれを生捕てその形質伐あらハ志しハ印播
江の猟師ふらべし

花嶋山　印幡江の中ふあり。平賀村ふ属ス俗誤稱離島盖北離使訓相近ムラ
此島へ舟ふて渡りし由云傳ふきど。今ハ田畑とふれり島の廻り
一里といくり。此絶頂ふむろし寺あり大日本寺といふ。今ハ不
動堂と竜り堂のこ殘きり。弘法大師護摩修行の古跡ふ在とて
護摩檀塚獨鈷水東の方山のなと今ふ存在せり。山ふ十六峯ハ
谷ありと云さて此山ふ登きバ西ふハ冨士南ふハ佐倉の城山
將門山東ふ當りて成田山北を望めハ筑波日光の山々まさ北須
賀村水神の洲嵜ハ。江の半ふ蛾眉をふし往来の高瀬船ハ白帆
伐揚て八方ふ乘ちゞへ。數萬の漁舟ハ柳葉伐ちらそゞきとく
千勝万景應接そるふ遑あらバ。誠ふ北總第一の勝地ふくし

潮ハ波ゝ多〳〵ハ蕎麥の花　梅麿

雨祈　文政初の頃印西の邊ふ名をト童と呼禪宗の僧あり。年十
九歳ふりといくり。元來何きの弟子ふ有〳〵ふ漂泊し来り

て二三年ふ成ぬ。其性いとろて愚鈍ふして常ふ道路ふ嘯唄ひ宿を需めず。樹下祠堂を栖とせ。三伏の暑月ふも綿入ぬのことを着て暑ーとせど蚤蚊といとふず。嚴冬素雪の寒さ夜も草物ふ半天一衣だ麻の破き衣ハ常ふ腰ふまどひて放さぢ食を與ふるふ二椀の外を食ひど。二椀食ーて後ハいろある珍味を出すとも更ふ手ふざも取らど。酒宴の席を嫌ひ又小童壯年のとの戯ふらふを煙草ふ火藥を交ぜ食物ふ蕃椒を混ー戯ふ是とあたへ困ましむるが故なりとて飲食の外一物をも乞ハざるハ實ふ愚直の者と云べー。或年の夏此あたり大旱ーて利根川を初め所々の江沼も渇水高瀬舟の通路も絶え井の水ハさて。國民の憂ハ大ったるど。是ふ依て地頭領主よりも諸寺諸山ふ仰せて祈らせられ村々の農民も種々の事をふして雲ろるが其驗ふ一時ふろ卜童云々るハ印幡江の中ふる佐久知宛ふ竜神住ひ是を頼ミ祈ーふハ忽ち雨降ーー早々臺を作りてえさせよと云。所の者ども大ふ笑ひ。この魯鈍ふる乞食坊主何事ハ知そうハ虚言を申出ー人の心を欺くなんと叱りられバどや〳〵疑ふ支ふうき我數年ったの竜神と友たり。依て竜神をたのむの法。ハ知きりと更ふ聞入ぎ。此事強て望ミられバ所の者共も長々の旱魃ふて困ー果たるをりふれバ。すぐ彼ゲ意ふ任ー。とて。卜童ゲ言葉ふ隨ひ。佐久知宛の傍ら江の中らふ臺ハ作ひてあたへぬ。卜童是ふ注連を張り四方ふ青白赤黒の幣ハ建種々の物を備へさ〳〵ト童ったの臺ふ上り突立あげと高声ふ云ったるハ。此度天災大旱魃ふて國民の飢渇見るに忍びぢ是ふ依て愚僧卜童一七日の間飲食ハ断禁ー佐久知宛の竜神ふ祈る希くハ大雨を下ー衆人の飢渇を救ハ志ゑよ。若七日ふ及んで雨降らぢんバ愚僧再び生て歸らど。佐久知宛へ身ハ投ー竜神の栖ハ

穢さんと云早てどつうと座しそのとも云うべ座禪の躰ふぞ見えふ々る。所の者共是まで い欺むゝると思ひ居たるがこの誓文我聞よりも大ふ驚き皆々あんどくらしてゐたゞ々り。偖ト童雪我初免しより々ふまで七日ふ及び々れど多ゝ〻こゝえべ。々ふこゝ我〻ト童が死る日ふきと皆〻案ど煩々る所ゝのト童ハ國の憂民の苦難我救ハんと命を懸ての祈ゞふきバそ の至誠の感ふゆ有々ん。其日午刻より俄ふ黒雲舞起り雨降出し追々篠を突く如く車軸を流してふふふ々れば。所れその共大に悦び長〻の飢渇の苦しミ今一時ふ蘇生したる心地ふりとて踊り上つてよろこびあくり。

夫よりのト童へ何をゝ恩賞そべきと相談せしゝ元より無欲の僧ふして金錢ハ手ふだも取らず二椀の食を乞のミふて心ふ望みるきとしあれバもべきやうふく斯てト童ハ五七日たゞ草物一衣ふ麻の衣と謝し場りとなく此邊を漂流せしが。それより何地へ行ふりん曾て眼ふ掛らぬ所いとのどる甚だこゝ我奇ふりとして疑ハざるものハふゝ

ゝ

瀬戸渡　上浮瀬戸の間ふあゞ佐倉風土記ふ水上三百九十丈と有

同書関宿路の條ふ在佐倉乾驛十佐倉至瀬戸八里此間有土浮渡舩六百歩瀬戸至荒野六里荒野至滝九里滝至木下六里木下至布川六里此間有利根川布川至小文間歴崖宿守谷絶乏野川過内守谷岩井百戸而達関宿一行

印西産物　筍　蕨　茨苽所々在馬先以口鏟刺古松根從鑿之　初蕈所々出種類最多

松露所々出春二三月間松陰土壤生之狀如彈丸外褐色内皆香脆味美氣如松蕈或曰陳仁玉菌譜所謂麥蕈者是也未詳是否

松露ふ二種あり米松露と云ハ色白くして柔ふあゞゝ栗松露といふハ色黄嵐を帯て堅し是下品ふあゞ又二十年以前までハ猪鹿兎ふど甚だ多ゝりしゝが近年一疋そゝとるゝふし

師戸渡　師戸臼井の間ふり佐倉風土記ふ水上三百九十丈とゝ

えたゞ

巖戸壘　岩戸村ふあゞ佐倉風土記云距佐倉西北八里六丁一里岩戸五郎亂安居之志津亂氏攻之家族皆死後頻有鬼哭燐火之怪臼

井圓應寺僧誦經止之因建寺今西福寺即是而其堂前紅梅則記亂安父子及妻所自殺處云東國戰記所謂岩戸城主岩戸五郎與吉田渡　吉田より保品へ渡し（米木茅田を經大和田新田舟橋ふ迄）より

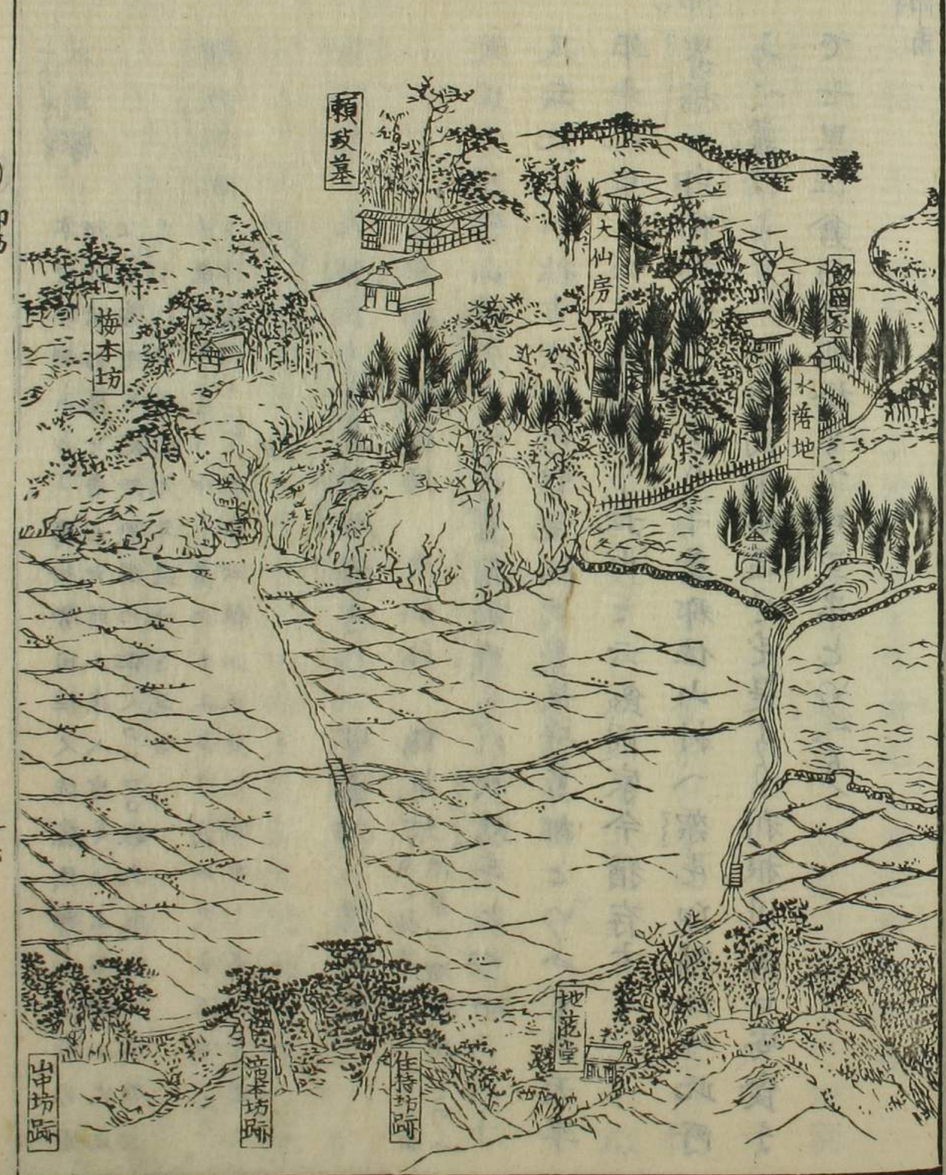
源頼政塚　結緑寺村ふあり佐倉風土記云傳治承之亂頼政敗死于山城守治遺命於其家士唱競二人曰負吾頭牽吾馬向東國去吾欲止處當重必座其地期以五旬過期而無驗則乘之二士奉囑東行二十日而至此覚甚重遂座封之植狗骨樹且建堂二士俱爲僧居此既而馬斃埋之栽櫻號名馬墳又有雜墳在桑橋臺（距家南十里許）此亦頼政所畜來此而漬云按唱競東去不見于平家物語盛衰記等但頼政首座于下總名古河在口碑而事似此所傳然不審孰是焉更有一說頼政矛深栖三郎光重其子陵助頼重共居下總九郎義經小年來此俟金賣橘次而往陸奥國事見于平治物語而橘次所寄之佛具在隣村瀧村瀧水寺又近村中根濱印播江處有橘次兄矛墳而傳其爲盗所殺則頼重之居必在此邊今曰御所柵者蓋近是焉所謂墓及堂似於頼重之所建恐後人彼此附會爲之說耳併記意見以俟重得明徵矣

柳晴天山結緑寺八人皇四十五代聖武天皇神亀年中行基僧正の草創と云本堂南向六間四面本尊阿彌陀佛八行基僧正の作側ふ金像の不動尊を安置ス御丈二尺餘（嘉元元九月十五日願主　權律師瀧尊と云）鐘あり新義真言臼井實藏院末寺ふり境内ふ花井戸扇の芝あり鐘出現の池ハ本堂の向ふあり一說ふ其後治承の兵乱ふ源三位頼政平家の爲ふ生害ー從臣下總國の住人下河邊村藤三郎清恒と云者御首を貰來り此所ふ葬り奉り剃髪して一宇建給仕ーなりふといふ

頼政塚（本堂より辰巳の方三丁斗山の上ふ有）

名馬塚（本堂より未の方二丁斗ふあり櫻の大木有て道路を覆公役そ其木をさねるとい）

結縁寺付
結縁寺并
頼政御の墓



入定塚　本堂の側ふあり傳伊勢国住人佐藤民部とゝふ者の娘頼政公の墓を尋ね此所ふ来入定をと云石碑ふ大比丘尼善智入定伊勢国の住人ロロロロ娘大永六丙戌年二月十八日享保九年造立と見ゆ

頼政石塔　本堂より左り少し奥の方ふあり高四尺余五輪ありき文字磨滅して不分云傳ふ正保の頃井上筑後矣建らしと

昔此寺ふ六坊あり今其地名殘まり　安養坊　住持坊

山中坊　瀧本坊　大仙坊　鵜見坊　古く梅本坊と云一由治兼の頃斯改とゝふ

天正の頃當山燒失して寺寶縁起殘らず灰燼をとゝふ

又云此里へ往古京都の官流飯岡豊後守尊經とゝふもの天平年中此里ふ來り開發せし地也と云飯岡家今猶存す

神寄橋　印幡郡舩尾村より千葉郡佐山村へ架を印幡江へ此所ふて盡橋より上へハ高瀬舩通ぜを是より利根川落口安食まで七里佐倉の鹿嶋橋まて四里半とゝふ

是より印南

平戸橋　平戸神村の間ふ架を是より撿見川海迫堀割開發

天明五乙巳年四月の古繪圖ふ平戸橋より撿見川海まて堀割長九千六百廿六間四尺五寸床六間深三尺より六丈三尺七寸まて新開反別三千百十三町五反一歩余と見ゆ田畑沼侍從の此事を與りて堀しめ給ひぬきど終ふ事ふらずして止ぬ其後まゝ天保十四癸卯年水野侯五家の大名ふ命ぜして七月廿三日より鍬初して堀しめさきど事ふらずして同閏九月二十三日ふ止さり

米本城跡　米本村ふあり佐倉風土記云距佐倉西南三十里六丁一里

村上氏世據之永禄元年三月十三日城主民部大輔綱清自殺而城廢焉

村上綱清墓　米本の長福寺ふあり綱清ハ民部大輔ふり天文弘治の間米本の城主たり永禄元年三月十三日自殺を同書

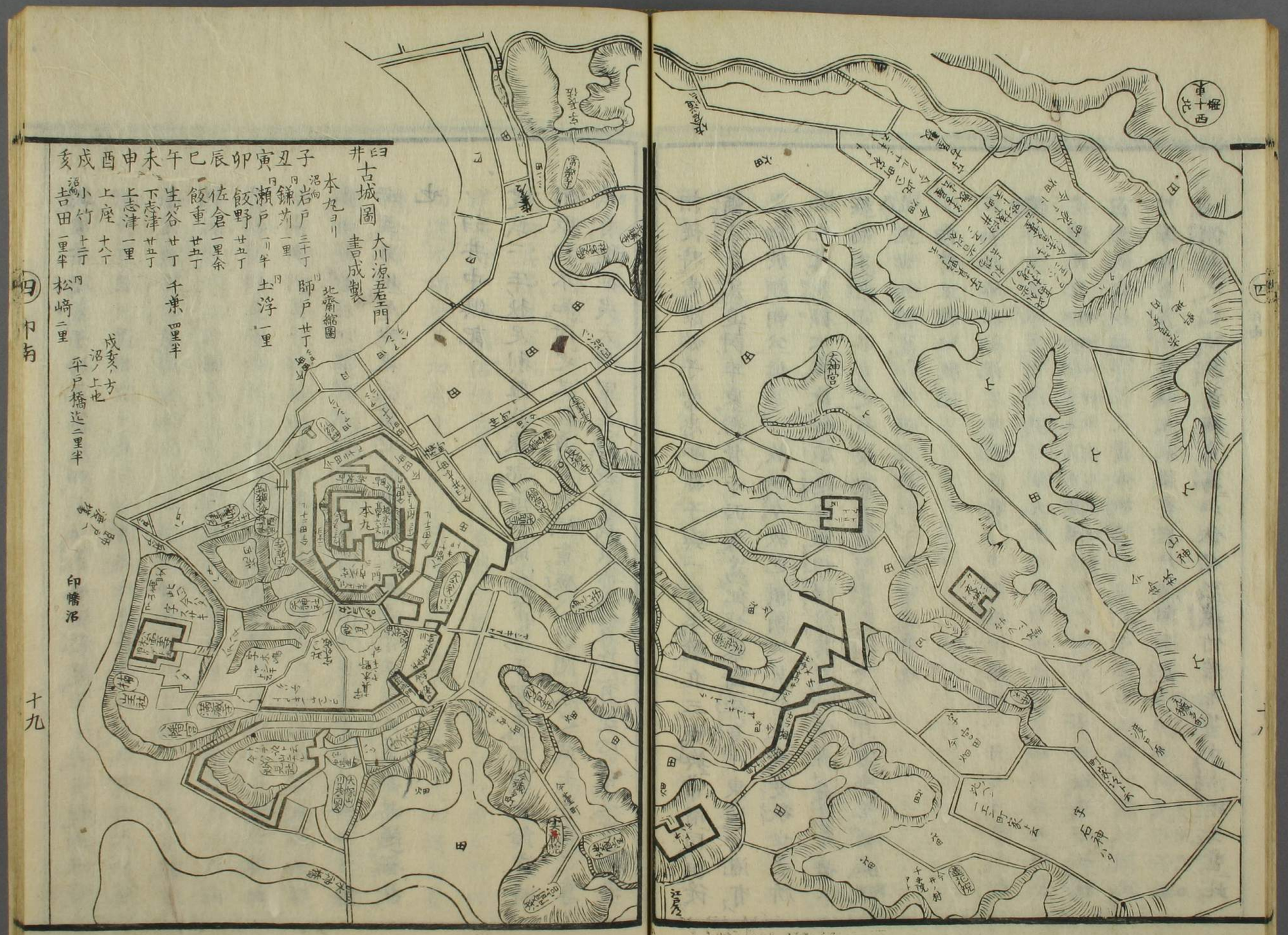
臼井城跡　臼井宿の臺ふあり。佐倉より一里餘西北の方あり。予一日臼井ふる大川源五右工門書成の許を訪ひて臼井の城跡を問ふ書成筆をとりて今の有様を図して予ふ示す則ち是を北齋ふ縮図ふさ〳〵めて在ふ出きゆ〳〵同所四應寺ふ傳ふる舊記を見せらふ用を摘て爰ふ出す

臼井元祖傳

千葉分常兼分付三男常康于數箇之庄園角一来、飯重、井郷、羽島、亀黒田、生谷、物井、下志津、上志津、上座、小竹、井野、青蓮寺崎、爲臼井城主因之號臼井六郎次于千葉分上總分之大族也此臼井城也者前廣野潮々後湖水漫々左右谷廣而深山繚而曲其雖尽人力豈如是堅固哉有利自守無使敵攻南望生谷之小保貝ハ林名松呈千年瑞北頗印幡波傳萬歳之響城郭周迴三里餘印西隅水一里許誠是名城也勝地也常康奉仕于頼朝公有勲功頼朝公爲大庭敗軍憑千葉到下總常胤將一族以相從時常康嫡子常忠太郎孫子與一等卒騎兵三百與常胤同相從爾來前爲追討平家粉骨于西海爲征伐奉衛碎身于東國常胤有大功於頼朝公偏是一族合力故也頼朝公於常胤其愛敬世之所知也其恩顧不浅故餘威遍親族但恨雖其有功労者被書千葉一族而不見記各自之名羨譽不遠聞芳芭無久傳自常康至祐胤四郎凡五世相續爲臼井城主奉仕于將軍家者也

臼井正統中絶記

正和三年秋祐胤不幸臥病醫治失術禱祝無驗八月七日卒去歳僅二十五唯有一息號竹若丸生年三歳祐胤遺言曰竹若丸成長之間胤氏祐胤之弟也爲志津城主東鑑ニ臼井ト有故号志津次郎代之行法令憐士撫民須如我在日胤氏始雖守兄之遺命欲情已生義心忽亡未過一歳私謀殺竹若丸自爲臼井城主家臣有岩戸五郎胤安岩戸ハ村名有印西胤安居之故号岩戸五郎側聞之已欲殺前夜自爲山伏之形藏竹若丸茂中潛逃去當此


臼井古城圖
大川源五左門
書成製
本丸ヨリ
北齋縮圖
子 沼尾 岩戸 三十丁
丑 鎌苅 一里
寅 瀬戸 一里半
卯 飯野 廿五丁
辰 佐倉 一里余
巳 飯重 廿五丁
午 生谷 廿丁
未 下志津 廿五丁
申 上志津 一里
酉 上座 十八丁
戌 沼ノ小竹 十二丁
亥 吉田 一里半
師戸 廿丁
土浮 一里
千葉 四里半
成亥ノ方
沼ノ上也
平戸橋迄二里半
松崎 二里
印幡沼
本丸
大神宮
江戸
十九
二十

時亂安禱爾于妙見菩薩願其無恙亂安載發于小舟自棹湖水歸岩戸然後又潛出岩戸奏歸君直詣于建長寺偏賴佛國禪師約成長之後令之爲僧禪師具聞其由愛憐養育如父於子漸長而後禪師不欲令之爲僧是出於恤孤之有實遂使之元服號左近行亂時告訴基時負時等欲令歸本領之地雖然天未命歟事終不成禪師示寂預謂弟子佛真禪師曰願續我志扶持行亂因其遺教佛真禪師亦恩顧厚不異佛國禪師行亂掌辛味若送春迎秋空終二十餘年至此時歷世之文書皆亡累代之珍器悉失是幼爲孤且過禍故也

臼井中興記

建武二年秋足利尊氏奉詔追討時行下向于関東相戰十餘度時行敗北不知所之其後尊氏兵威重歷八州関東之武士皆屬之尊氏自稱征夷大將軍奏討義貞義貞亦奏尊氏有逆心依之京都邊騷動時佛真禪師與行亂相議曰尊氏卿者必主天下之器也此度相從以抽軍忠可達著錦帰之望於是行亂將精兵五騎而屬于尊氏卿其費用咸出于建長寺一山與佛真師之扶助且自首途日於建長寺一山緇侶相集毎朝誦尊勝陀羅尼百遍以祈行亂有戰功而還本領地其功德豈徒然乎然後延元元年二月尊氏卿摂劣豊嶋合戰失利敗走赴于筑紫菊池武俊率九州之兵於筑前國多々羅濱與尊氏卿對陳尊氏卿曰敵軍衆而強我兵寡而疲自運命今日已窮矣於是行亂以爲吾拔戰功遂素志正當今日戰場也不是因神力何能之乎敬念我家守護神且禱之宇佐八幡及宰府天神自誓曰若功不成則使我速戰死生而何爲主從六騎直先登大破菊池軍其勢絶比倫所謂如以礫投卵豈是人爲實知神助菊池敗比而後九州怕其兵威悉屬于尊氏卿其感悅不少乃約行亂云我脫今日之危難偏在行亂之忠功後來天下歸掌中日再歸本領地

謝之其誓約不可變也天下已定之後曆應元年秋尊氏卿舉行亂任從五位下行左近將監爲臼井城主歸賜世所領之地且有可改行亂爲興亂之嚴命言是取再興廢家之義也又命千葉介貞亂曰速可使亂氏志津退去而守爲臣之禮義嗚呼天運無不復興亂再爲臼井城主其昌榮又如昔時謂之臼井中興也

圓應寺草創記 并八幡宮大神祠造營

興亂再爲臼井城主而後自心以爲我中興之功成者元是佛國禪師之撫育佛真禪師之扶助也其恩之不可忘也不唯是我永至子孫亦猶可追憶於是招請佛真禪師住持于豆州國清寺以爲開山新立精舍山號瑞湖寺名圓應且寄附領地十之一興亂事佛真禪師恰如子之於父晨省昏定所謂能竭其力者也寺與城隅一池爲之橋使其往來有使也又預自心期我若生子以其長先爲僧嗣法佛真禪師併是欲謝恩之有餘也 道菴和尚傳云興亂之長子曆應二年己卯十月二十四日誕生從少爲僧法嗣佛真禪師爲圓應寺第二世道菴和尚則是也

奉勸請宇佐八幡宮及宰府天神于臼井長致報賽八幡宮有城南其山号八幡山其寺号滿蔵寺以爲別當令掌神事八月十五日有祭禮也興亂初相地于此時自以所携之楠樹枝植地曰若此楠樹活而生葉以爲靈神來格之證然後其樹繁茂碩今神前有是周三丈斗嗚呼其妙不可測也又於城中草創菅神祠修覆妙見堂以八月二十五日祭菅神以七月二十二日祭妙見自致如在之禮矣想夫興亂之爲人也其誠能感二神其勇忽挫三軍幸雖爲中興之祖自處富貴長記爲郎當之身他恤寒饑大抵以數件支平生之志行其可察也 此外舊記雖多不悉繁以畧之 ○諸国主齊録下總国禪宗ふ二十石 印幡郡臼井御圓應寺

大楠樹 右古城跡の内西北の隅ふあるに側ふ山王權現を祭る楠の周圍五大餘。ちゝ東の方へ九尺斗り隔てゝ一丈ばかりあるが二本あり枝の根付たる物ありと云り。其奇なる支図を見て知べー

臼井
大樟圖
周圍五丈餘
東方一丈餘

むゝし此樟のもとゝ。大蛇住て折々人を捕食ふ。何人の退治したりけん。其大蛇の皮ふりとて。方二三尺斗ゝて。鱗ハ四文錢程ある様。同所の寶藏寺傳へ持り。予も見はべるに。尋もしげ。如何したりけん。近頃ハ見せぬと云り

大田圖書墓　臼井圓應寺の西古城跡ゝあり。舊記云備前守俊亂前爲臼井城主時文明十一年己亥正月十八日太田道灌江戸城主將二階堂七黨等一萬餘騎兵渡市川來臼井圍城俊亂預聞知之故設備侍焉千葉介孝亂引援兵來共守之道灌良將也俊亂亦良將也彼此盡計累攻守爭戰功相戰十餘度勝敗未決春過秋來長尾之麾下數國之武士來共援守七月十五日大戰道灌之兵伏尸數百梟太田圖書戰死道灌猶力攻軍失利敗北太田圖書墓有臼井郭外蓋是所戰死之地也里民有疾疫則祈之無不應夫生有勇力者死有神力者自是俊亂声名高世間威風奮於國中者也

おとつる　古城跡より東南の方。一町斗ゝるまて。田の中ゝ石の小祠あり古ハ此邊ミゝふ芦原ありと云里人おそれさゝとゝふ。咳の出る人ゝ此祠ゝ。焦椒とゝ茶を奉りて祈念すべ奇妙ゝ治るといへり。

その故ハ。正和三年當城主臼井祐亂八月七日不幸ゝして病死す年十五子息竹若丸僮ゝ三歳祐亂の弟亂氏志津城主遺言ゝよつて。竹若丸の後見とゝある亂氏始めハ兄の遺言を守るといへども。忽ち逆心を生ゝ私ゝ竹若丸を殺してミづから臼井の城主とゝあらん事を謀る。ゝゝおとつといへる下女ありけるも此支を知りて岩戸五郎亂安印西岩戸の城主ゝ告ぐ。亂安大ゝ驚き自ら山伏の姿ゝつくり。竹若丸を笈の中ゝ藏し。潛ゝ逃まて鎌倉ゝ去り。建長寺佛國禪師ゝ養育を賴ミ。生長の後本領の地ゝ歸らゝあんと欲すゝのち足利尊氏ゝ屬して本領安堵せし。臼井左近將監興亂といひしハ。ものの竹若丸の支ありさて臼井の城あそい

下女のおたつ後見亂氏の密謀殘岩戸五郎ハ告なる支頭へれ
しを亂氏大ハ怒り已ハおとり殺さんとしおとり危くも
その場をのがれ私ハ城をぬけ出印幡江のほとりなる芦原の
中ハ隱る亂氏あとを追ひけ捜し求むれども曾てきなし此時
おとり誤て咳をきとりしが亂氏ハ見付られ直ハ首を討き
しとあり里人甚く是をあはれみ其所へ石の祠を建てあきと
おとりさぬといふおとり咳をおそるる支此故なり依て咳の
念願ひあふ支をこやり也とい

臼井八景 并序

下總國臼井鄉瑞湖山圓應禪寺者中興城主平行亂有故所草創
之精舍也境地靈景色絶後負古城喬木脩竹圍遶前抱湖水閑鷗
浴鳧浮淤晴好雨奇之有餘日涉夜遊不飽若試謂之趣東望飯野
霽雪西映舊基夕陽浮萍斷金玉流瀨戸挂影晴嵐吹瑟琴響淵崎
松聲光勝疎鐘報暮諸戸片帆促飯沙平水淺旅雁下遠部秋夜靜
兩瞑漁翁繫舟戸岸加馬春待花木曙隻納竹陰涼遷喬鳥荅嶺蟬
秋愛楓林酒冬和樵路之歌曠野蛩寒汀鷺大凡四時之佳興一日
之眺望變態萬千不遑枚舉者也 僕 投老于寺前濯懷于湖水已五
年于茲矣寺之僧的公者方外舊識也乘興共消日於吟境訪寂復
終夜燈前問遺世之樂大且無窮公常恨言此多景地無詩人之詩
無歌人之歌者何其闕乎若不補之風流之罪也歟於是遂賦八景
以示之一唱則如坐夫勝地信所謂有聲之畫也後見此什人不可
無詩不可無歌公曰請 僕 亦題之見義豈黙止漫綴詩歌以附佳作
之後自顧東施顰也竊要鮒蝦蟹一啖不可食者以釣金鱗所願在
焉時

元祿十一年十一月晦日　臼井隱士　信齋　叙

瀟湘秋月
シラヽ山
飯野暮雪
シラヽ山
遠浦帰帆
山市晴嵐
クヽイ
城嶺夕照
雨天夜雨
光明寺晩鐘
遠寺晩鐘
遠浦帰帆

舟戸夜雨　　宋的

夜雨蕭々舟戸天深泥封路接平田青燈耿々漁窓外幾許浴鳧喧水邊

　　信齋

漁する舟戸の沼のよるの雨ねまてや猶の浪まくらしき

遠部落鴈　　宋的

乱行飛雁落田疇蘆葉半凋遠部秋貪啄稲粱欲充餧沙頭倦翼且踟躕

手弱折て越し川路たかしとかそへまちてとや落る厂かね

飯野暮雪　　宋的

一丘突兀氣蕭森冬嶺青松半落陰瓊屑紛々裏日暮玉龍忽見偃波心

師戸帰帆　　宋的

帰り来る舟は夕部漕えぬ人にかくといはのゝおとの舟かなし

布帆一幅泛清灣萬頃煙波往亦還潭面風休如鑄鏡影含翠黛漬前山

　　信齋

こゝろ人の舟戸の波の紅葉のふえくてうくる夕くれ

瀬戸秋月

晴湖漂影月如流残漏偕光人倚樓瀬戸清風今夜景吹激我嘯洞庭秋

もろこしの西の湖もかくやらんまい照つ沼の瀬戸月うけ

城嶺夕照　　宋的

空見平湖與攢峰昔年層閣總無蹤孤城返照紅將斂近市浮烟翠且重

　　信齋

いく夕部入日のなごりをしからむしら雲かゝる古跡

光勝晩鐘

一遍宗風已儼然星霜五百有餘年鐘聲遥響孤雲外知是稱名落

日前

[illegible]

洲崎晴嵐

掃盡江山絶嵐霽朝來子細見洲崎曝翅鷗驚平沙上交葉蒹葭淺水濱

[illegible]

跋

大凡有名無實者異方景物也茲吾蘭若門外瑞湖者不減瀟湘之佳趣而永超洞庭之逸興矣然今古東夷之境而冠盖無題艶志緇素靡伸雅情故富景不富句貧吟不貧興嗟乎盖有實無名者乎此故與信齋徵君纂録逸餘稈補闕漏而製作積而俱成於燈前之一軸皆是翰林壬人子黒之客卿不可得緘默者也焉時

元禄戊寅之冬　　盲亀子　　爲之跋

鹿嶋橋　角來より佐倉田町へ架をかゝる川といふ。物井川の下流ふゝて。是より東一里餘ふゝて印播江ふ入る

物井川　佐倉風土記云。在印幡郡二源皆出上總國一自野呂來歴田谷當北流十餘里而至坂戸一自吉倉來歴大谷流用草七曲巖富西流十餘里而至坂戸二水相會入馬渡橋下又西北流六里爲物井川出于小名木細流過鹿渡亦會于此而北流三里至羽鳥又與高崎川會遂北流於城西過鹿嶋橋六七里而入印播江

高崎川　同書云二源一出於文違高松之間西流過下勝田橋下十許里歴高崎南一出立沢南西流過飯積橋下坤流十餘里過高崎北二水會于高崎西又西流過高岡歴真田橋下流于城南會于物井川俱入江

佐倉　印播郡ふり入口ふ鹿嶋橋あり。橋と渡りて田町ふ入る。田町の中程右の方ふ田町御門こゝ。海隣寺坂我上きハ海隣寺兵

木ゝ至る此所武家町ふり。横町より右へ曲り新町有町弥勒町
本町本佐倉町とへて酒々井ふ至る。是より中川ぞ過て成田ふ
達ぞ

佐倉風土記云城在印播郡之中而稍近西舊曰鹿嶋山其為形勢居高
陽隰濕阻要屏翳足乎遠通面卯背酉左右子午前置市廛曰田町
曰新町曰彌勒町曰本町曰本佐倉町曰酒々井町是曰佐倉六町
農賈相雜民庶安堵（至京師八百有八里距江戸七十九里東南至上總国界四十二里東北至常陸国界亦四十二里西北至下野国界五十四里西至武蔵国界七十二里六丁一里）同文略昔千葉介平常胤ヲ輔
胤二至ル迫代々居千葉輔胤城ヲ佐倉郷將門山ニ移ス其後胤
富相鹿嶋山之要阨使邦胤移城于此築營未成邦胤卒其子重胤
幼冲天正十八年與北條氏共敗于相模國小田原城
東照大神祖賞鹿嶋山之形勝遂命利勝土井城之慶長十六年春正
月十一日興功七年而成矣名佐倉城云、

諸國圭齊録下總國時宗部ふ三十石印播郡佐倉郷海隣寺又三十石
同郡同郷清光寺と見えたり
土産　佐倉炭　蒟蒻　三度栗　蕨　初蕈　松露
野駒

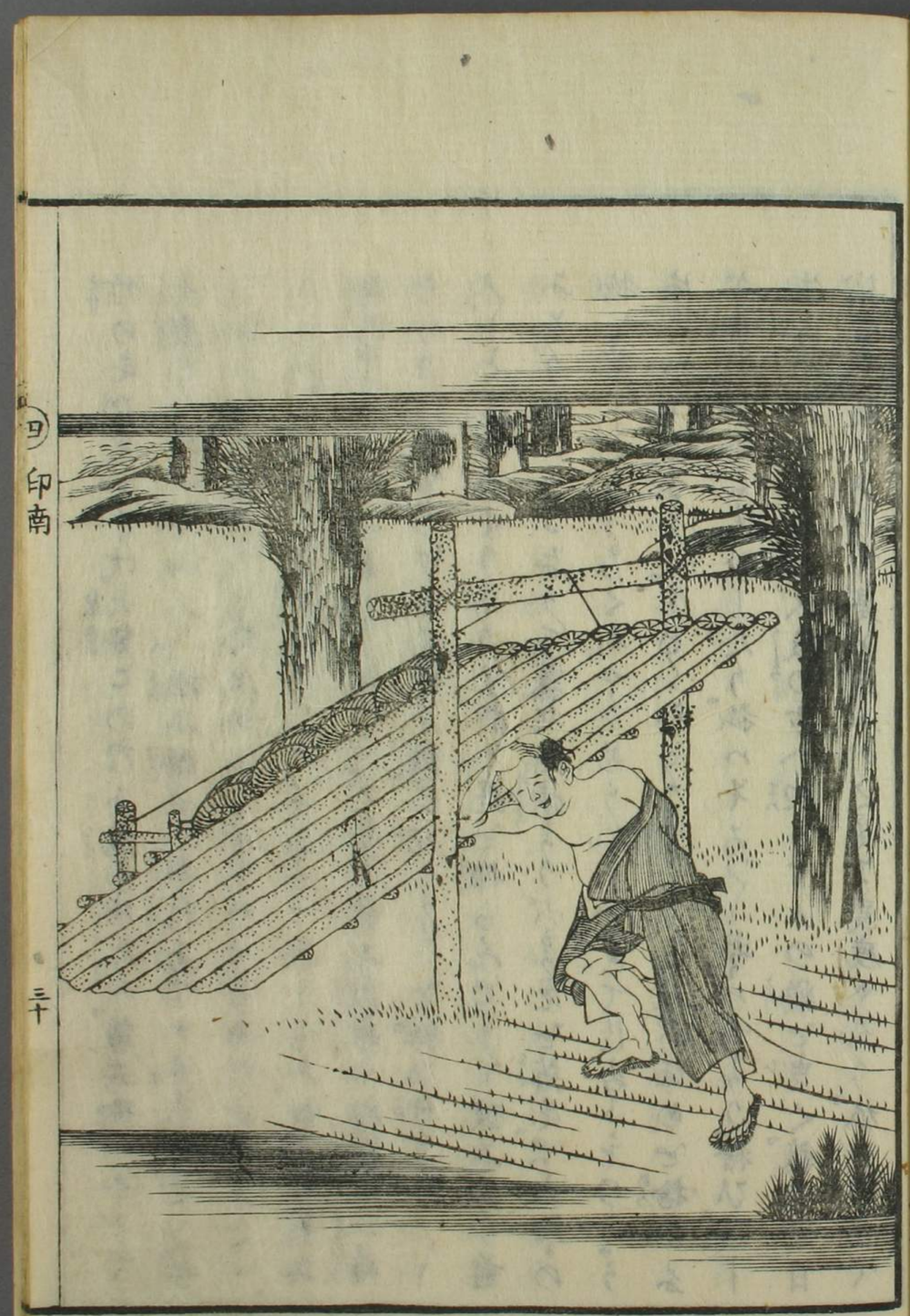
本佐倉　城趾ふり今の佐倉ふ對ー本佐倉といふ。佐倉風土記ふ
千葉介輔胤千葉より城ぞ佐倉郷將門山ふ移ぞとありて注ふ
（在今城東六里餘稱本佐倉）と見えたり　東照大神祖廢將門山城文禄元
年封武田信吉于此建館於本佐倉大堀居之云云と見えて其後
慶長十六年鹿嶋山（今佐倉城）ふ興功七年ふして成の後大堀も廢せ
しふる屋ー（今本佐倉ふ續きて大堀濱宿大佐倉御廐ふとあるぞ
ふ形大佐倉の郷名）
諸國圭齊録下總國曹洞宗部ふ二十石印播郡大佐倉郷勝胤寺
新義真言ふ二十石同郡大佐倉郷寶珠院と見えたり
將門大明神　將門山ふあり。平將門を祀る故ふ杜と以て山の名

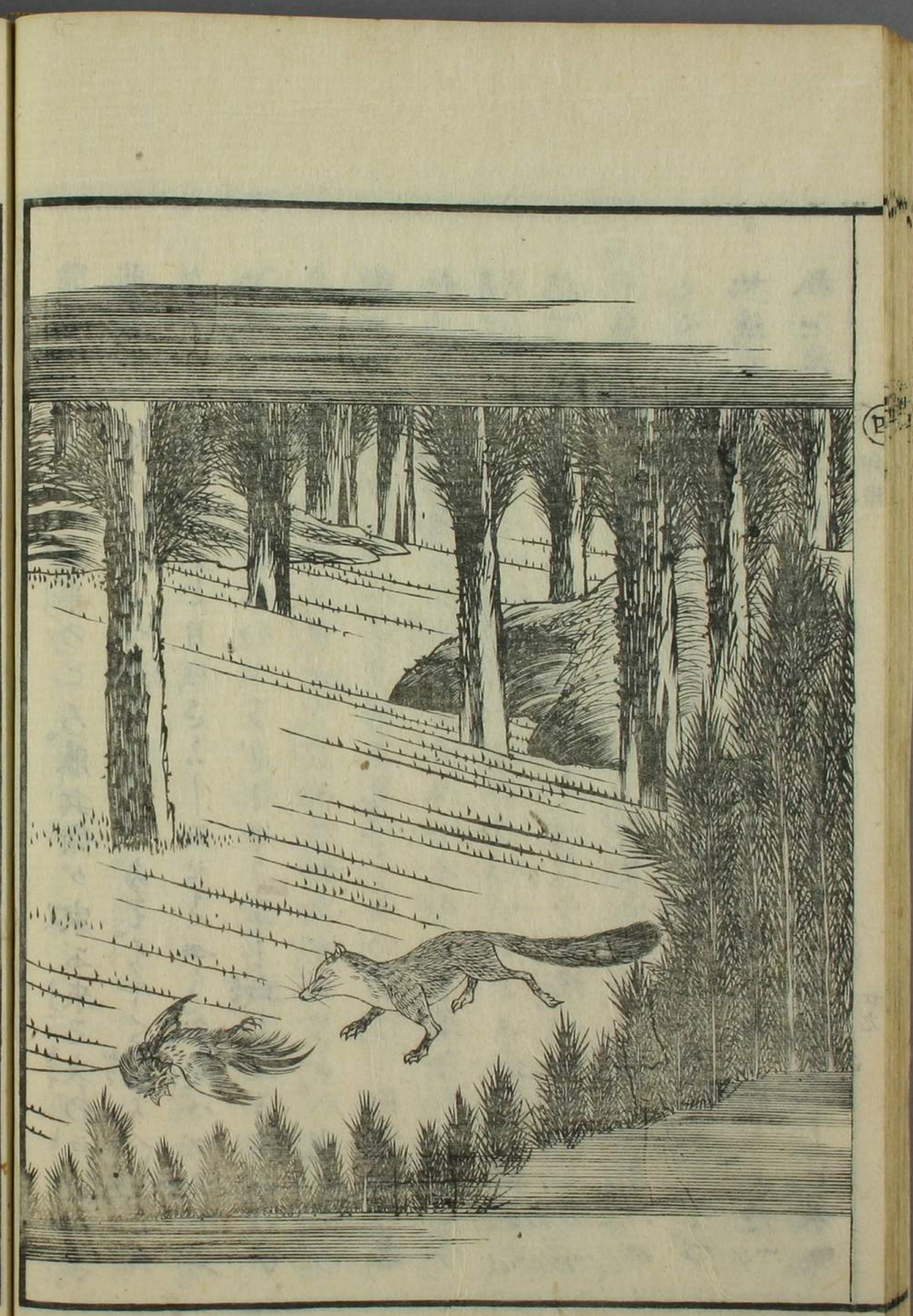
もと云。石の鳥居あり銘を刻して曰　奉寄進將門山大明神石華表（右柱）兼應三（甲午）天十一月日總孫印播郡佐倉城主從五位下（左柱）と見ゆ例年八月三日祭禮相模あり

堀田上野介紀朝臣正信

稲荷藤兵衛　佐倉より一里餘り東の方墨村の百姓なるもの男常ふ狐ととる事ふ妙と得あり故ふたうう藤兵衛といふ（物類称呼）ふ世俗さつ狐ゆ（狐）ありの神使ありといふ故ふ稲荷の二字を音ふとふへてさらと称るなるべし藤兵衛常ふ自分居屋鋪の裏ふブツチメ（狐を捕る仕かけ也）を拵らへ置此所へ餌を来りて捕と云ある時用支ありて常孫木戸へ往ー帰りもおるけの原ふて狐ふ出逢ー故おの狐を欺ー誘ーして我が家へつき帰り裏山のブツチメふかけて捕ーとあり此道法十里あまり在てその内ふ舟渡三ケ所ありといくりもさ或日藤兵衛千葉野と通りもくる時狐ふ出逢ー故欺ー来りてブツチメふ懸んと志たりーが古狐ゆゑ中く平安くかくらず一両日過てうの狐

隣家の牌ふ化て夜半のところ藤兵衛が家ふ来り表の戸を叩き藤兵衛くくブツチメへ狐がかくつあるもやく起よくくと云くるゆゑ藤兵衛ふと目覚さまーー云くるもう今夜ハブツチメを懸そぐつたり狐のかくるるを見もうふー欺ーおるふといひもて偶然と寝て仕舞さり翌朝藤兵衛が云くるハ夜辺隣の牌ブツチメふかくりさり行て見べーといひける故家内の者起いで、至り見るふ大ふる古狐一疋がくり居たりーとあり（藤兵衛めざまーふとありの牌を狐ありとさとり即智のあいさり識ふ名人と云べー）もさ或村ふ狐多く住て人家の鶏ふと捕り食ふゆゑ村内の若者ども相談ーて藤兵衛をたのみ来り狐を捕る所見さきよーー望ミけきバ心安き支あり（あり）ー為さ仕方ーて捕て見せ申ーとてもづ地蔵堂の庭の隅ふブツチメを仕ーけ置我ハ山ふ到り此所へ狐を連来りてとる故各々ハ此堂の内ふて見物せべーと表ふ





竹のそだきをさげ。大勢この内ゟ隠き居たり。藤兵衛いやゞて
支度とゝのへて山ゟ入。酒ゟ酔さる声色ゟて大声あげきつゝ林
へおらぬゝ。狐ヤアーイたうゝゟをゆくめぐをあひさやゞど、
さんぐゝゟ呼ゝりゟゞら山中残名ぐりありくゝゟ。程ゟく藤兵
衛。狐をつれ大酔の身ぶりゟてゝの堂の前ゟ出来りぬ。腰ゟ二尋
ばかりゟ縄とつけ。その先ゟ鶏の死しゐるを結ひ付よろゝく
くとして引ぎりありくゝ狐ハ是を捕らんとして後ゟゟり前
ゟゟり矢まへるをゞて藤兵衛懐よりおまをを落そこハ大切の
物を落しゝとりこちくゝゟゆうめうぬゟ食きて居ゐるをのゟう
はくへをるをゝい。ゟどゝ初とり言してゝうれおゐめを捨ひゟ
ゞら終ゟたゟき肴しゝたり。狐ハそろゝく捨べへより。捨ひ残し
おゐめ残とり食ひ。又後の方へ廻りてゝの鶏を曳く。藤兵衛目
残覚し。足をあげて是を追ゟかくをる支度々ゟり。狐ハ跳きて

側のブッチメゟ近よりたハらくやうをを伺ひ段々とゟりへ
這入幾度も白ひをうゞ終ゟ餅をくハへて横とひゟ飛いるを
其柏子ゟ刎木をつきてブッチメゟゝりぬ其自由ゟるゟと實
ゟ座舗の猫を嘲嗤をるゝ如し予藤兵エゟ逢し時餅ハ何ゟる
哉と尋さきハ鼠の油揚ゟりといくり然るや
佐倉の儒臣窪田某狐藤兵エの傳あり云城之東墨村有猟者名
藤兵エ善捕狐人呼曰稲荷屋稲荷司穀神也或謂神即狐也或謂
狐神所使故謂狐亦曰稲荷以藤兵エ捕狐又轉曰稲荷屋云稲荷
屋恥狐不施罠罟不持弓銃爲製大扱方丈餘設覆数所巨石加其
上以助其重而毋開其端支以小柱繋柱以縄繋縄以餌狐来食餌
縄動柱仆從而覆落焉以是狐多壓死又時持餌遠出拷而所之嘗
夜出有邑小吏山崎由良治者継至爲大叱藤兵エ曰藤兵エ汝農
而不爲農好害生数且狐性靈過於人狐不嘗害若其害狐如此而

不止得殃不少矣。言畢而去藤兵工惶伏謝罪。既而思之。日余之出也。則以夜至也則深山。非人可至。乃豈老魅誑余乎。因往来誠把所特餅投之。若有就而食者大喜。且投且行。既至覆所。則吏死于覆中久矣。藤爲帯。双扶在腰。而形已爲狐。尾曳脩々也。由良治爲吏威信行於民。故狐化其形。籍其威。以遏其害已也。於是藤兵工名聞乎近郷。数里間野無杜之跡矣。

窪田子曰。藤兵工之事可謂怪矣。然此余之所親聞見而可信者。藤兵工嘗云。城中多狐。使我掩殺数日。則積屍如山。快哉言也夫城狐社鼠人之所共惡。而不能去者。何也。彼其所託城社也。所負人主也負人主之威。而託城社之固。以行其蠱魅妖誑之術。雖有猛獒。將垂尾聽命之不暇矣。尚安得而除之哉。然則藤兵工最爲之將如何。曰餅而誘而殺之而已矣

酒井町　佐倉六町の内なり佐倉明細記ハ天正十九辛卯年酒

酒井町建御入国初メテノ取立町ナルハ未久ク榮ユルヤウニ可仕旨　両御所様ヨリ大久保重兵工ヘ仰付ラルヽ間酒々井篠田大隅其外年寄共ヘ下サル、證文狀有之中略　船著モ先年ハ濱宿御湊ナリケル處新堀舟戸御取立下サレタリ下略

佐倉風土記云慶長中酒々井北開渠引印播江而著舟於酒々井而今渠廢只存新堀名耳漕在二道一登戸達佐倉南三十里寒川並連而在海畔此泛海西南五十里達江戸最爲捷馬一大櫻濱達佐倉東六里泛印播江北十八里而至利根川而左折沿市川入海而達江戸馬右從流而下者歷滑川金江津神崎佐原小見川而至銚子入東海又右則過上總而通安房武藏左則通於常陸陸奥

中川　佐倉風土記云出自印播郡尾上乾流而十里過中川而入印播江此處より印播江花島山えゆく遥かに筑波山を見る

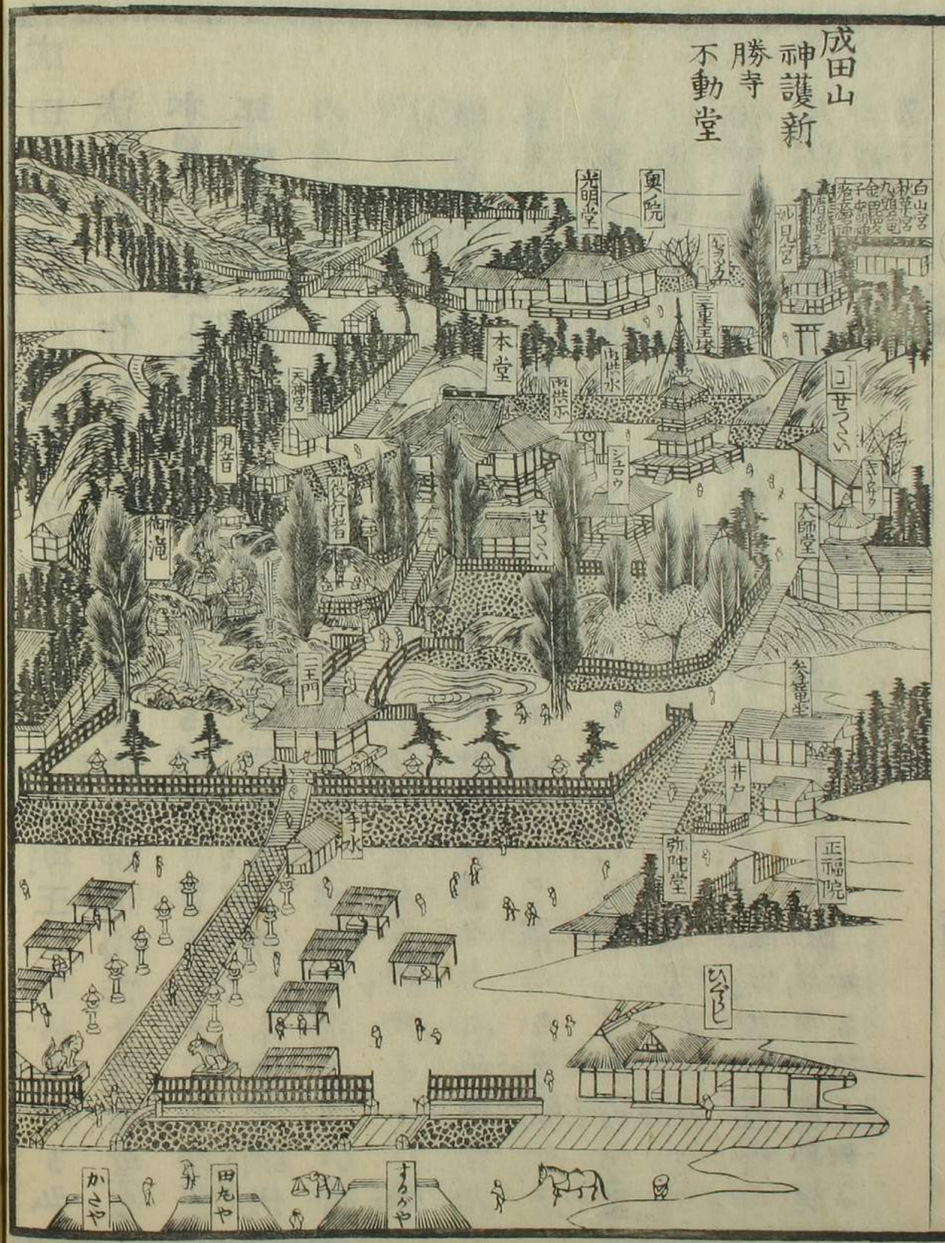
大佛頂寺　岩橋村ニあり創造の年時詳ならず弘法大師大佛頂の法を修する處なりといふ諸國圭齊録下總国新義真言部云十石下岩橋村大佛頂寺とそ也

野馬取　牧ヶ所あり其日ふ當りてハ遠近の老若男女郡集して見物ス。佐倉風土記云駒、野駒爲良家駒次之其野駒在坰南者自千葉野以東至根古名北者酒酒井以東至寺臺曠原縱衡各三四十里風牧于所々官籍其牝牡消息之數皆有厲禁歲之六月吏來取之其執之處謂之辻字書無此字俗用此爲押入之義有古米古兄二訓此訓古米辻凡七處曰内野曰高野曰柳澤曰取香傳古之摺墨者出于此曰小間古曰矢作曰油揖是也每辻三四十步四圍築防傍開二門及時列卒呼噪牧士數騎驅逆之或百或數十以聚一所而納諸辻乃官吏監臨命牧士簡擇毛物不可者驅出之可者留之一人竿頭繫繩纏駒首又一人躍上駒背急抱其頸仆之執之盡其辻而止矣牧士數十人散居村々

三度栗　原野有之樹不高子亦小春生夏華秋實冬和薪苅之蓋第栗屬也同書此栗一年ふ三度實をむすぶ。故ふ三度栗と云。又冬春の間野を燒時。落栗自やける。是をやけ栗と云。右爲珎

成田山新勝寺　埴生郡成田村ふ在り不動明王二童子を祀る弘法大師の御作ふして始ハ山城國高雄山神護國祚寺護摩堂の本尊かり故ふ靈驗甚多く世ふ知る所かり昔宋雀天皇天慶二年相馬將門亂を起し、時廣澤遍照寺の寛朝僧正ふ命ず調伏の法を修せしむ乃この尊像を奉持し難波津より海ふ浮び將門ゞ新都に程近きこの處ふ在て調伏の護摩を修せしハ感應忽ふ顯れて明る三年の二月將門終ふ伏誅せりこの後僧正尊像を奉ゞて歸洛せむとするふ忽重くして擧ぐる事能ハず且靈夢の告あるを以て永くこの地ふ留む乃勅して伽藍を建て高雄山の寺號ふ准ゞて神護新勝寺と號す猶緣起ふ詳かり佐倉風土記云。不動堂在成田。曰神護新勝寺不動明王坐像長六尺。弘法大師所刻。本爲山城國高雄護摩堂之本尊。以下の文意緣起ふ同ゞ故ふこれを畧す

成田山
神護新
勝寺
不動堂



相馬日記巻三云抑坂東ふ不動明王の古靈場三所あり相摸國大住郡の大山寺と武藏國多摩郡の高幡寺とこの新勝寺とかり中畧今三所の中ふこよかう參詣人多ろるハこの成田の靈場かり

常總軍記巻廿二義長計畧千葉勢敗軍條云これハ天正十三乙酉年常陸國河内郡岡見の岡見中務信貞の臣栗原下總守義長下總國海上郡高田ふかて同國佐倉千葉新介勝胤の將鳥居筑後村田兵衛荒海左衛門を破りし事をいへる條かり三陣の大將荒海左衛門最勇士ふして是ハ荒手とい ひ慎深き者ふて酒ふも醉ハざりれるがこの軍ふ出でしろども敵ハ潮の湧くが如く威勢強く大將鳥居村田を討ちしかバ物ともせずして荒海が勢を取込めて火水ふかれと攻めしかバ荒海自勇を振ひ敵を數多打取りその身深手淺手十三處ふ受けて今ハ心身疲れて岸山の谷へ轉落ち微塵ふ爲て敵ふ首ハとりれざれども終ふ討死しさりれる中畧爰ふ荒海左衛門ハ軍散じて郎等死骸を尋ねしろども曾て知れざりれる荒海ハ岸山の谷の底ふて死しれるふ不思議かるろか何方よりとも無く十六七歳の童子二人來りて荒海が死せし屍を撫でそふふ忽荒海息を吹返し蘇生せり餘ふ不思議ふ思ふ故ふこの邊ふハ見も馴れざる最氣高き小人達かり何處何かる所よりろ來りせそひてかく我を憐みそふふや更ふ不審晴れやりず御名を名のりせそへやと申しれる二童子微妙の御聲ふて我こそ成田不動明王の御使矜迦羅制多迦の二童子かり汝明王を信じ奉る事餘人ふ超え常ふ歩を運ぶ志我が誓願豈空からむや荒海今度軍事ふ出で深手を負ふて今既ふ死すと雖定業ふ非ず急ぎ行きて助くべしと佛勅を蒙り來りさり汝必疑ふ事勿と仰ありて光を放ちそひて成田の方へ飛去りそひとり左衛門夢とも現とも分け難く信心肝ふ銘じ御迹を伏

仰ミるふ不思議や歩行もおぼざる身の何とかう邊ありー
木の枝ふ取付きて立ちーがそれより歩ミ出で一足づゝ運び
行きにるふさーも十三所の深手おれども苦痛も更ふ無くた
どりくて道ふ出るかゝる處ふ左衛門が家子堤戸平大夫牟礼
半四郎兩人ハせめて左衛門殿の御死骸を犬烏の爲ふ爲む事
も忠おきふ似ミり亂軍の紛おれバ若やこの谷底ふて死ーゆ
ふふや尋ぬべーと薜蘿を便ふ取付きて尋ねるふ左衛門ふ
巡合ひーが手を負ひー柄子も無く最不審おりーゝバいゝお
る事ふやと問ひるふ左衛門感涙やるせおくーてまかくの
由物語せり兩人も奇異の事ふ思ひ且恙おきを悅び負ひまゐ
らせて荒海の館へ下總國埴生郡ふ在り歸りたるが左衛門ハ太刀疵鎗
創の迹ハ十三所ありくと若きーゝども只凹ミさるばかりふ
て血も更に走りず痛も無かりるハ不思議といふも愚おり

縁起云總州生實大巖寺の開山道譽上人ハ天性愚鈍ふーて學
業の進ミ難き事を歎き嘗てこの尊ふ歸依ー參籠持念する事
百日期滿ずる夜の夢ふ不動尊持ちゆふ利劍を呑むと見て即
覺めさり覺めて後これを見れバ黒き血流れて床の邊を穢せ
り然ーて後慧解人ふ勝れ終ふ大德智人と爲りゆふとぞ佐倉風土
記不動堂條云、傳、小弓大巖寺開山道譽、自患資鈍、禱請百日、夢呑
明王劍、血流滿床、然後慧辨邁人、其袈裟今猶在而血痕黯然云、
祐天大僧正御傳記古岩南枝著 巻一云團通和尚祐天剃髮ーて日數
も過ぎその上祐天漸寺家ふ馴れおーミゆへバ徐御經をも教
へばやと思召ー淨土宗ふて初學ふ先教ふる三部經の字數三
五字づゝ口傳ふ教へゆへども中々一字も覺ふー此の如く晝
夜教へゆふ事凡五六十日ふもおりゆへども祐天いゝおる前
世の業因やり單の一字も覺ふー中畧○この間祐天上人擯斥
を同寮の善長ふ諫められ既ふ入水せむとせーせられ一七
日斷食籠を爲ー靈告を得それより増上寺開山堂ふ一七
成田ふ赴く事を記す祐天

よく運の極ふや人里離れし野原ふて路用袈裟衣まで追剥ふ
剥取られ前後途方ふくれられしゝこの上又もいかゝる憂目
ふ逢ふとてもかゝる大事の立願をおどろ無ふ爲し申さむや
と少もおくるゝ意なく遂ふ成田山新勝寺別當の許へぞ着き
ゆふ急ぎ立願の趣別當へ精く御談ありれバ別當も感じ入
り籠堂へ同道あり祐天悦く思召し南無不動尊誓願空からず
バ哀愍納受座して余ふ智慧を授けゆへ三七日のから断食身
命を盡し祈請し奉る者ふり願ハくハ結願のタふハ勿躰ふく
も不動尊體を現しゆひ直ふ智慧を授けゆひ天下の名僧と爲
してゝびゆく祐天ゝ胸中を明鏡を照し驗覧有て願望成就ふ
さしめゆへと祈請あるぞおそろしきこの間一七日の事を畧す　祐天ハ猶
も丹誠を抽祈請有り程ふく二七日の願境ふもふりれバ旅
疲といひ芝ふて開山堂へ籠り断食致されそれより直ふ復か

くの如く断食二七日ふもふる事ふれバ寂早御身も疲果て只
生きゝる耳の有様ふれども一心ハ日ふ勇ましく岩をも通す
念力ハ畏といふも餘ありかゝる慶ふ奇やある夕方ふ年七旬
とも見えれる畏し氣ふる姥出來り祐天くと聲をゝけ汝さこ
そ身も疲果め寂早心願も成就せむ何不動納受ありざらむニ
七日満ずれバ速く國へ歸りゝらへ其方途中ふて追剥ふ奪ハ
れし烏目一貫文袈裟衣まで我々取返し來れり此を持て故郷
へ歸り學問出精すべしと有りれバ祐天も不審晴れゆハず
こハ忝き御厚恩いゝふる御方ふて座せバかくハ憐みゆふや
らむ御名慕しくゝふり然れども余ゝこの度の立願ハ懸命の
念願ありて三七日のから断食是非この日數満てずバ置くべ
からずよしそれまでふ飢死せバ本望よ必々御恤下されふと
歸る氣色と見えざれバ姥ハ麓へ歸りれり暫過ぎて又出來る

ハ別當の僧祐天くと聲をゝけ汝漸身と疲れさり寂早立願成就せり天下の名僧と爲る事疑ふ事あるべからず三七日籠するふおよバずこれより直ふ立歸り學問出精するからバ世ふ比ふき智慧僧とふるべ〜早とくくとのゆへバ祐天首を回ら〜愚ふる別當の仰ゝふ段々の御教御情ふ似されどもこの度の立願ハ命を惜ミ身をかばふ如き愚ふる願掛ふ非ず思詰めさる事ふれバ必三七日籠り眞の不動の尊體を拜〜智慧を授ゝり終るまで中々國つハ歸るまじ必御捨置下さるべ〜飢死ふ及バゝ本望ふりと血眼ふ爲てのゆへバ奇や今まで晴れさる空卒ふ震動雷電〜て岩を碎き石を飛バ〜御堂の震動たゞ事ふらず祐天少も畏れゆハず一心不亂ふ不動を念じ假令岩ふ摧ゝれても一心の竟鬼爰ふ止まり眞の不動を拜〜奉らずバ體ハ微塵とふらバふれと怒の背裂くるゞ如くロふ不動の

御名を唱へ動ずる氣色ふかりれる猶と奇ハ今まで別當の僧と思ひ〜ゞ卒ふその長一文許の不動と現れ御身より火焔を出〜左右の御手ふ長短の利劔を提げ善哉く吾ハ是成田不動ふり汝ゞ丹誠無二の念力類ふき事を感じ今現れて示す者ふり汝ゞ前生の罪惡深き事二世三世死變生變りても盡る時あるべゝらず此ゝ因て今生ふ於ても明盲とふりさるふり今より智慧を授からむと思ふふらバこの長短二劍の内一振呑て藏腑の惡血を吐出ざ〜新血を生じて生改めて智慧を授ゝれこの二振の中長きを呑むべきや短きを呑むべきや否や祐天慎で曰く短きを呑ミても體を破らむ長きを呑ミても體を破らむ何を呑ミても體を破るふ二ハ無〜余長きを呑まむと大口を開て待ちゆへバ忝も不動尊咒を唱へゆひ右の御手の長きを情ふくも祐天のロへ刺〜ゆへバわつと言ひて俯きその

儘息ハ絶果ヌれりかくて新勝寺の別當ハ夜もほのぐと明れけれバ祐天の事を不便ヌ思ひ今頃ハ料身も疲れぬらむ二七日を滿てぬれバ飢羸れて死せむも知れずいざ訪ひて事問ふべーと籠堂へ參られて祐天の有樣を見ゆふヌ血ハ流れて體を浸ー俯ヌ伏ーて息斷えさり別當仰天ーゆひーゞつくぐと樣子を見ゆひて是さゞ事ヌてハ有るまじこの籠堂へ他人の入るべき樣も無ー不動の爲さーめゆふらむと急駄の僧を集め即座の護摩を焚きゆひ不動尊を念じて曰く祐天小僧一念の誠心二七日ヌ滿つ願ハくハ祐天蘇生ーてこの有樣を明白ヌ明らーさびゆへとせめうけく祈りゆへバ不つと息をつきむくと起きて別當ヌ向ひ只今まで數々の御芳志生々世々忘れまじ立願成就ーて眞の不動の尊體を拜ー智慧を授うりゆおりその外劔難の次第不思議の事ども一一ヌ語りゆへバ

一座の僧さち感じ奇異の思を爲ー別當も祐天をかき撫でゝ前代未聞の名僧やと感じゆふ事限ヌ先御利生の實を見むとて般若經を一度讀さて聞うせゆへバ祐天これを聞取り固より知れるゞ如く一字一點の差も無く諳じゆふぞ奇ヌるこの書甚誤ありーを今大率正ーて引きさりさて同書巻四祐天上人土浦の淨福寺ヌて說法ありー歸るさ法華宗徒の害せむとせーを不動尊雷雨を起ーて拒ぎー事をいへり今これを畧す祐天上人の事ハ祐天大僧正傳及び三緣山志ヌ精ー世ヌ一相無切有居士の祐天上人一代記とて六巻あるハ戲作ヌり又累女解脫の事ハ新著聞集巻五近世奇跡考巻二相馬日記巻二ヌ見えさり死靈解脫物語とて二巻あるハ虛言多ー相馬日記巻三云成田不動尊ヌ詣くれてゝ御前の町家ヌ舍りーヌ隣ヌ集まれる男女ども騷ゞーう物いひうちさるゞひで安寢もせさせす夜追の馬の鈴の音耳近く聞こえ籠人らゞ丑のくびぞおど言過ぐるハいさう更けぬるおるべー

上尅

不動奉納

二童子の白きもひとり雜阿花　蓼太

利根川圖志卷四終